
長寿

馬河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長寿

【Nコード】

N3292E

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

長生きを目標に生きた男の栄光と苦悩。ある小説のオマージュ的作品です（知ってる人は知ってるかも）。

老人よ

老人よ

何故嘆く

息子達の心がわかって

おそろしいのか

彼は長生き願望が強かった。死ぬ事は非常に恐ろしく思えたし、生きているのは素晴らしく思えた。長生きに、憧れのような感情を抱いていたのは間違いない。その証拠に、長寿世界一の泉屋というじいさんが亡くなった時、子供心に

「自分が世界一になってやる」
などと思ったものだ。

幼児から成人に到るまで、彼は実に平凡な人生を過ごしてきた。成績も中くらい、入った高校や大学も中間レベル。常に真ん中の位置をキープして、さほど面白くない日々を送っていた。

入った会社も無難な所だった。社内でも出世街道には乗らず、それなりに昇進し、それなりの給料を貰っていた。嫁も実に平凡普通な女性、美智子を見合いでもらい、盛り上がらない結婚生活を味わった。

「自分は何の為に生きているのだろう」
なんて、よく思ったものだ。

そんな彼でも長男の康太が生まれた時は感動した。皺だらけの顔をして、この世に生まれ出てきた新たな生命に興奮を覚えたものだ。康太が赤ん坊の頃は、彼も熱心に世話をした。

しかしそんな気分も束の間だった。子供が出来てからというもの、妻は子育てに追われてそれまで以上に相手にしてくれなくなった。

さらに仕事の忙しさにかまけて子供の相手も少ししか出来なくなり、長男は母親にばかり懐くようになっていた。何時の間にか、彼は孤独に陥っていた。何の楽しみもなく、年月だけが過ぎていった。

72歳、妻が急性心不全で死んだ。しかし悲しくも何ともなかった。既に家庭内別居状態になっていたし、顔を合わせてもほとんど口を利かなかったのだ。

「彼女の人生は何の為にあったのだろうか？」

そんな疑問だけは残ったが。

というのも、彼と共にいながら会話もない生活で辛くはなかったのかと思われてならないのだ。何の楽しみも目標もなく、人は生きていられるものなのか？彼にはそれが腑に落ちなかった。確かに妻は子供とは仲が良かった。それを支えにして、生きていたとでもいうのか。対称的に彼には楽しみも目標もあった。そう、長生きだ。

気付いた時にはいつしか長寿世界一になっている自分がいた。それも確認し得る限りでは世界最高記録だ。155年とは、何と長い歳月を過ごしてきたことだろう。息子も早や死んでしまい、今や孫夫婦に面倒を見てもらう日々。

彼はこの為に生きてきたと言っても過言ではない。楽しい人生を送ってきたとは思えないからだ。新記録を更新した時は、これまでの人生の中で最も充実した気分だった。地球上の誰よりも長く生きてきた事実は、彼に誇りを持たせた。ついに彼は頂点に立ったのだ。今まで何もかも平均的だった自分から、初めて脱却したのだ。

高齢にも関わらず、彼の肉体は健在だった。白髪になり皺も増えた見た目はともかく、体力は50歳の頃と比べても遜色ない。朝勃ちすらしっかりと続いていった。

そんな彼だが、注目度は一気に増した。当然、周りの状況も一変した。マスコミが取材の為殺到し、彼の特集記事や番組を制作した。その様子を見て、今まで彼をないがしろにしてきた孫夫婦は、手の平を返したように厚遇するのだった。テレビや雑誌でも「孫夫婦の

深い愛情」などと、偽りの記事が出た程だ。彼も悪い気はせず、あらゆる取材に応じていた。何一つ目立つ事のなかった人生が、様変わりするのは痛快だった。次第に彼はいい気になり、有頂天になっていた：

しかし世間はとても飽きやすい。時が流れると、一時期は隆盛を極めた彼の人気もすっかり沈静化した。何時の間にか、月に一回程度、生存を確認するような取材ばかりになっていた。ひどいもので、彼に何の変化もないとつまらない顔をする記者さえいた。再び孫夫婦の態度も変わった。年寄りの世話をするのが面倒くさいような素振りが目立ってきた。一度、孫嫁が

「あのじいさんいつ死ぬのかしら」

と呟くのを陰で耳にした時は、啞然として立ちすくんでしまった。当初は目標を達成して喜んでいた彼だが、ここに至って周囲の熱気の覚めた様子を見るにつけ、憂鬱な気分になってきた。

「これ以上生きる事に何の意味があるのか」

と、迷いが生じ始めていた。

「ひよつとして死んだ方がいいのかしら」

とすら思った。

そんな中、彼は曾孫の誕生に胸踊らせた。孫夫婦は極力彼を赤子に近付けたくなかったようだが、そんなのはお構いなし。彼は無邪気な赤ん坊を可愛がり、こっそり隙を見ては抱いた。読書やビデオ鑑賞しか気を紛らせる方法がなかった彼にとつて、曾孫の存在は励みになった。演歌で「何でこんなに可愛いのかよお〜」などと、孫について詠った歌詞があったがまさにその通りで、目の前の赤ん坊はこの上なく愛しい存在であった。

それと同時に今の自分と対極的な存在、それも今まで目指していたもののスタート地点である赤ん坊に興味が湧いた。もう記憶の断片すら残っていない頃の出来事は、彼を郷愁に浸らせ、夢中にさせるに十分なものだった。彼は赤ん坊に関する記述を読み漁った。

例えば正木某が書いた「赤ん坊が夢を見る」という本。赤ん坊は

母親の胎内にいる間に今までの先祖の栄枯盛衰を見るといふ。それどころか、場合によっては擬似的に己れの未来を見通す事もあり得る。赤ん坊にはそういった超特異能力が備わっている可能性があるというのだ。人間にはよく「初めての事なのに、何故か経験した事があるように思える時」があるが、それはこの赤ん坊の夢が原因であるという。

「胎児が自殺する」という記述にも心惹かれた。胎児はあまりに大きなショックを受けると、母親の胎内で自殺してしまう事があるという。賢い胎児はへその尾で自らの首を絞めて窒息死する事すらあるらしい。死産と診断されるケースでも、この胎児の自殺によるものは少なくないという。あんな鬼の孫嫁の胎内から、よくぞひ孫みたいな可愛らしい存在が自殺せずに生まれてきたものだ、などと思う彼だった。

書物が教えてくれる事柄に引き付けられ、彼は夢中になって読み耽った。ひよつとしたら、

「もし再び赤ん坊に戻れたら……」

などという気持ちもあつたのかもしれない。

だが、楽しみばかりは続かない。段々と彼への風当たりは強くなつていった。孫嫁は彼の存在そのものが苛立たしいらしく、居場所を少しずつ奪つていった。生まれてからずっと懐いてきたひ孫達も、どう洗脳されたのか、

「臭い」

「汚い」

を連発して次第に彼から離れていった。彼は苦悩した。今の状態が生き地獄のように思えてくる程だった。

寂しさが募り、ついに彼は自殺を考えるに到った。最初に考えたのは首吊り。切ったり刺したりよりは苦しくないと思えたのだ。彼は家に誰もいなくなつた時を見計らつて、脚立を使って天井に縄を吊した。そして縄に輪を作り、首を通す。一気に脚立から降り、首から縄にぶら下がった。

吊られた瞬間、後悔した。こんなに苦しいものだとは。楽どころか、ジワジワと締め付けられる行程は地獄に等しかった。嫌だ、こんな死に方は…。彼はもがき続ける内に意識を失った。

気が付いた時は布団の上にあった。目を開けると、孫夫婦が憎々しげな顔をして上から覗き込んでいた。仕方なく助けた、という表情がありありと浮かんでいる。要は自殺された際の世間の風評を気にして、彼を救ったのだった。

彼としては良かったのか悪かったのか。地獄の苦しみから解放されたのは良かったが、死ぬ好機を逃した事は残念に思えた。何よりもう一度死ぬのに再度苦痛を伴わねばならない事が辛かった。

次に思いついたのが睡眠薬による自殺。あちらこちらの薬局で睡眠薬を買い込み、大量に服用する。何だか訳がわからない内にサツとこの世を去れそうだった。

夜中、孫夫婦が寝静まった頃、彼は早速試みた。大量に薬を掴んで、口に含み、水で一気に流し込んだ。数分後、頭がぼんやりしてきた。若干吐き気もする。だが気持ち悪いというよりは、ふわふわと宙に浮くような感じに近い。段々と意識が遠退いていく。

何となくだがこのまま寝てしまっただけではない気がした。自分はやっぱり死にたくないのか？意識朦朧とし、横にあつた縄で首を絞める。必死に己れの首を締め上げて、目を開こうとする。だが、意識が薄れてきており、加減がわからない。現在、自分が経験しているのは夢かうつつか？首が絞まることすら快感に感じるような…

病院。今まさに赤子が母親の胎内から出て来ようとしていた。だが、

「あーっ…」

皆が一斉に声を揚げた。出てきた赤ん坊は死んでいたのだ。それもへその尾で自分の首を巻き付けていた。

「赤ん坊が夢を見る」そして「赤子による自殺」。彼は自分の未来を見て、絶望を悟ったのだろうか？

彼が母親の胎盤の中で見たものが本当に現実をつつしたもののなか、ただの夢なのか、それは誰にもわからない…

(後書き)

長く生き過ぎた人を描こうと思って書いた作品です。そこにある作家の作品のオマージュ的要素を盛り込みました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3292e/>

長寿

2010年10月8日15時52分発行